龍谷大学
図書館報
No. 6

来・ぶらり

引札（「京都ホテル」龍谷大学長尾文庫所蔵）

目次

図書館のもう一つの仕事 ……1
経済学部教授　水原総平
追跡// R君の深草図書館見聞録 ……2
自分を情報化する ……4
法学部教授　見上崇洋
私と図書館
「まず、カウンターへ」……5
法学部4年　森　聡子
「あなたは図書館を知っていますか」…6
理工学部4年　平井英雄
「静」のための「動」……7
社会学部4年　八田桂子
私の推薦図書
「〈さよなら〉の事典」窪田般彌〔ほか〕編著 4
短期大学部2年　武市佳史
「山登り半生記・エベレストママさん」
田部井淳子 著……5
文学部4年　緒方芳恵
「雲の墓標」阿川弘之 著 ……5
文学部4年　田中岳史
「雨森芳洲」上垣外憲一 著……6
文学部4年　小川昌保
龍谷大学図書館の歴史(6) ……8
瀬田図書館課　成山雅康

図書館のもう一つの仕事

水原総平

いま、大学の個性化が叫ばれている。個性化と言えば、それはどんな独創的な研究が行われているかによっても決まるだろう。第3次長期計画のなかで、わが大学も社会的評価に結びつく研究を促進しなければならないことが強調されている。そのためには、何と言っても、独創性に富んだ研究が行われることが大切である。この点において、図書館が大きな役割を果たすことは言うまでもないことである。

現在のわが国の図書館には1つの問題があるように思われる。今では、いずれの図書館も原則として公に売買されている文献を集めている。しかしながら、研究者にとって独創的な仕事を行うためには、一般的にはワーキング・ペイパーとかディスカッション・ペイパーと呼ばれていて、まだ公表はされてはいないが進行中の最新の研究成果が書かれている文献に触れることが肝要である。この種の形態で研究成果を発表することは、欧米の研究者の間では、すっかり定着している。だから、彼等の間では、この種の文献は互いに交換されて私的に読まれている。このような研究スタイルは、わが国でも、自然科学分野ではすでに日常的に行われていることであるが、これからは人文・社会科学分野でも流行する傾向にある。すべての図書館が個々にワーキング・ペイパーを収集することは困難で無駄でもあるので、例えば近畿地方で1つの大学図書館でよいから各国で発行されているこの種の文献を集めて貸し出すことが重要であり、いろいろな分野で国際化を進めているわが国でも図書館が研究者にこのようなサービスを提供する段階にきているように思う。（経済学部教授）

追

R君の深草図書館見聞録

さて、今日は「国際経済」というテーマのレポート作成のために深草図書館へ資料を探しにきた経済学部のR君が、希望する図書を見つけ出すまでを追跡してみたいと思います。R君は決して図書館を利用するのがはじめてではありませんから、書名・著者名によってカード検索をすることは知っています。しかしながら、R君が調べたところによるとカード検索では希望する資料を見つけることができませんでした。さあ、レポートの提出期限は迫り、結局R君は図書館カウンターに出向いて、閲覧係のKさんに相談することにしました。

R　君：「すいません『国際経済学の展望』という資料を探しているのですが書名・著者名カードで探しても出てこないのです。どうしたらよいのでしょうか。」

Kさん：「君が探しているのは、単行本ですか、それとも雑誌論文ですか。雑誌の論文までは書名・著者名カードでは出てこないよ。」

R　君：「たぶん雑誌の論文ではないと思います。探している資料は国際経済に関することですから、資料を探すために何か良い方法はないでしょうか」

Kさん：「国際経済に関する図書であれば、333.6の分類に属しているから、該当する分類カードを見たらどうですか。もし、国際経済に関する論文も探すのなら、カウンター近くにある『雑誌記事索引―人文・社会―編』をみれば関係論文も探すことができますよ。」

R　君：「それじゃ、一度分類カードを見てみます。ところで『雑誌記事索引』を見たあとはどうしたらよいのです

Kさん：「龍谷大学図書館に所蔵されている雑誌は『龍谷大学雑誌総合目録』で探すことができます。まず第一にうちの大学にあるかどうか、確認して下さい。」

R　君：「わかりました。目録を使って確認してみます。」

こうして、R君は半信半疑ながらも分類カードを見てみると、333.6の分類カードには国際経済に関する図書が記載され、いずれも2階書棚にあることがわかりました。さらに内容を充実させるために『雑誌記事索引』の『国際経済』の項を見ると、多数の論文が記

跡 !!

神牧　宏次
木村　　優
小室　昌志
友次　正之

載されていました。そこで、興味をひかれる内容の論文を見てみることにしました。

R　君：「『雑誌記事索引』の中に“国際経済”に関する論文が記載されているようですが、これを『龍谷大学雑誌総合目録』で探せば、深草図書館にあるかどうかがわかるんですか？」

Kさん：「そうです。号数の確認をしてから雑誌目録を見れば確実に必要な文献を探し出すことができますよ。」

R　君：「ここに、

*ASEAN経済発展の現状と展望*人615590
林　華生：中京商学論叢37(3)〔'91.2〕p31～64

と記されているので、『龍谷大学雑誌総合目録』で『中京商学論叢』37(3)の所蔵を確認すればよろしいのですか？」

Kさん：「そうです。この雑誌のこの号ならばあるはずです。もし目録に掲載されていないような学術雑誌を探している場合は、『学術雑誌総合目録』によって他の大学図書館に所蔵しているかどうか調べることができます。他の大学図書館に所蔵していることがわかれば、直接訪問して閲覧・複写をする方法（紹介状の作成）と、遠方の大学図書館にしかない場合は郵送によって文献の複写を申込むことができます。」

R　君：「学術雑誌で必要な論文は複写によって手にはいりますが、もし探している図書が既に貸出されていたり、新しく発行された図書で購入して欲しい場合はどうするのですか。」

Kさん：「貸出図書の予約をすることで、その図書が返却され次第利用できます。また、図書の購入希望をする場合は所定の用紙があります。いずれの場合もカウンターまで来てもらえばいいですよ。それに、うちの大学には、深草図書館以外に、大宮図書館（人文科学系）、瀬田図書館（社会学・理工学系）の３館がありますから、テーマ、課題に応じて図書館を使い分けるのも良いかもしれませんね。」

このあと、必要な雑誌記事の複写と貸出図書をかかえて、R君は「ありがとう」の言葉を残して、提出期限の迫ったレポートのために足早に図書館を後にしました。

以上簡単に図書館での業務内容を示しましたが、これで利用者の皆さんに100％理解していただこうとは思いません。どうか、深草・大宮・瀬田の各図書館に何度も足を運び、自分なりの図書館利用方法を開拓してみてはどうでしょうか。図書館は皆さんのためのものであり、皆さんの学習、研究を深める場ですからカウンターを大いに賑わせてください。賑わせるのは“あなた”です。

自分を情報化する

……ながめてみよう「本の表題」

見上崇洋

「卒論を書くにあたって初めて図書館を利用した」、という学生が、それも、複数いる。このこと自体、学生の生活リズムから推察すると、それほど驚くべきことではないのかもしれない。サークル、バイト、カラオケ、ゲーセンの合間に、教科書でも眺めることがあれば、上出来で、いや、教科書だって、レポートでも課されなければ広げたりしないし、そのレポートだって、教科書のごく一部に適当に感想をつけておけば、「優」はもらえる。だって、数万人の受験者の中から選ばれたのだからそれくらいのことは簡単。おいしいおいしい学生生活、これでもう少しお金さえあれば…。

情報化社会といわれて久しい。多様なメディアによって、「情報」が伝えられてくる…ようにみえる。しかし、「情報」がいくら価値あるものであっても、それを価値通りに認識し利用することができなければ無意味であろう。情報化社会において重要なことは、相変わらず、個人個人の力量であり、言い替えれば知識の蓄積なのである。大学生活でどこまで自己の力量を蓄積するか、4年間は結構長い時間である。

私の場合、大学に入って受けた最も大きなカルチャーショックは一般教育の歴史の授業であった。歴史関係の書物も少しは読み、知識もあると自負していたが、そんな物語風の歴史など、別の次元に追いやられてしまった。すると、図書館や本屋の専門書の棚に並んでいる本の表題が、それまではささいな事柄を趣味的に扱っているものとしかみえなかったのに、その奥に非常に広い世界をもっているように感じられだした。それぞれに、自分の知らない世界があるのだなあ、という感じである。

もちろん全部を読めるわけでもないし、読んでも理解できるわけでもない。しかし、それぞれの本には、著者が格闘している世界がある。手にとるだけで、それを、のぞき見できるなんて、とても簡単なことではないか。自分に少し「ひっかかる」表題があれば、目次を眺めたり、自分には関心のないテーマに興味を示す著者はどんなタイプか想像したり、それだけでも、自分の世界が広がるであろう。

暇つぶしには、図書館で、本の表題を眺めてみよう。

（法学部教授）

私の

「〈さよなら〉の事典」

（大修館書店）　窪田　般彌〔ほか〕編 著

現代においては別れと言うものが多く、その別れの感じ方も千差万別、人それぞれ違うものである。この本は色々な人の文章や詩をさよならと言う別れをテーマに集めた短編集である。その人がその時どのように感じていたか、微妙に違うと言う事が読んでみれば分かると思う。電車の中で少しだけ読むのには丁度良い位の短い文章ばかりであり、退屈はしないと思う。機会があればぜひ一度読んでいただきたい一冊である。

（短期大学部2年　武市佳史）

私と図書館

「まず、カウンターへ」

森　聡子

ある授業の課題で、外国史に関することを何か１つテーマに取り上げて、班で発表しなければならないことになりました。班のメンバーは５人で、それぞれ意見を出し合ったのですが、なかなか全員の意見が一致しません。

結局、何日もかかって決まったわけですが、その過程で私は改めてあることに気づきました。それまで図書館といえば、必要な本を探したり、勉強する場を提供してもらったりする所としか考えていなかったのですが、それだけではないことに気づいたのです。それは、図書館には数多くの本や机があるだけではなく、親切な職員の方々がいらっしゃるということです。

私達は今回の発表のことで、図書館の皆さんに何度もお世話になりました。「こういう発表をしたいのですが、何かいい案はありませんか。」というような漠然とした相談を持ちかけたこともありました。また逆に、「この本を読んだらわかりやすいよ。」とアドバイスして下さったり、進み具合はどうかと声をかけて下さったりしたこともありました。発表の日まで時間があまりなくあせっていた私達にとって、図書館の方々のアドバイスや励ましはありがたいものでした。

何事もそうですが、同じ物でも角度を変えてとらえることによって今まで気づかなかったことが見えてくるということがあると思います。今回のことを通じて、私は図書館の使い方の幅が広がったような気がします。　（法学部４年）

推　薦　図　書

「山登り半生記 エベレスト・ママさん」
（新潮文庫）　田部井　淳子 著

これは山登りの好きな一人の平凡な主婦である田部井さんが、子供の頃の山との出あいから、地上の最高峰エベレストの頂きに立つまでの、彼女の半生記を綴ったものである。独身時代はもちろん、妻となり母となっても自分の好きなことをやり通すために様々な努力を続ける彼女に、そしてそんな彼女を心から応援し協力する彼女の夫に、とても感動した。一人の女性として生涯打込んでゆけるものがあるのは素晴らしいことだと思った。

（文学部４年　緒方芳恵）

「雲の墓標」
（新潮文庫）　阿川　弘之 著

主人公吉野次郎の日記の形をとったこの作品は、学徒動員によって学業半ばにして軍人となることを余儀なくされた大学生達の学問への未練、恩師や父母への思慕、迫りくる死への恐怖と絶望といった様々な苦悩を淡々とした筆致で描いている。特攻による死を前提としているためか、全体に暗く異常な雰囲気が流れているが、それだけに非常にリアリティがあり、平和な時代である今こそ、読むべき本であると思う。是非一度読んで下さい。

（文学部４年　田中岳史）

私と図書館

「あなたは図書館を知っていますか」

平井英雄

我々大学生にとって、「図書館」というスペースは、非常に大切なものである。大学生というより学生、更には、我々人間にとって大切な物である。図書一冊一冊には、我々人類の歴史があり、また、未来が記されている。この様な言い方は大げさかもしれないが、しかし、事実我々の先人達が長い年月かけて発見し、学んできた事柄を我々は今、一冊の本から学ぶ事が出来る。特に、さまざまな分野の事を学ぶ我々学生にとっては、心強い武器である。講義などでわからなかった事、必要な知識を与えてくれる1人の教授なのである。

しかし、私はこの様なすばらしい図書を有効に利用して来ただろうか。

私は龍谷大学入学以来3年間、瀬田図書館を利用してきた。といっても利用するのはきまって試験前、もしくはレポートを書く時に資料を集めるのに利用する程度である。考えてみれば実にもったいない話である。さまざまな知恵を持った宝物がたくさん並んでいるのに、その内自分は何冊の本から恩恵を受けただろうか。瀬田図書館の図書の中には、特に洋書の中には、未だに誰の手にも触れられることなく、さみしい月日を送っているものもあるであろう。

我々はもっと図書館を利用するべきである。我が瀬田図書館は、我々学生にとって恵まれたスペースである。この図書館は私と同じく3回生であり、図書数は充実しているとは決して言えないけれど、コンピュータによる図書検索や、開架図書館であるので実際に本を手にして必要な図書を探せる。またグループ学習のための学習室、更には、大学図書館であるから、公共の図書館と違い小説や趣味の本はないけれど、勉強につかれた時は、AV室にて、数多くの名画や教育ビデオなどを見ることができる。これは我々学生にとって非常にうれしい設備である。

私は今後、4回生になるにあたり、卒業研究や卒業論文など、ますます多くの図書の恩恵を必要とするであろう。あと1年間という短い間ではあるが、せっかくすばらしい図書館が、こんなに身近にあるのだから、もっともっと利用して、大学生活の思い出の1ページに瀬田図書館の図書達が残るように図書館とつき合って行きたいと思う。

（理工学部4年）

私の推薦図書

「雨森芳洲（あめのもりほうしゅう）」

（中公新書）　上垣外　憲一 著

雨森芳洲は、元禄年間から享保年間にかけて朝鮮外交に活躍した儒学者であり、朝鮮語、中国語に通じた語学者です。そして芳洲の一つの固定された文化の絶対的な優越を否定する世界観は、今日の日本人が考えるべき問題である「日本人の国際化」という問題に対して、少なからずの考えるヒントを示していると思います。日本人の海外旅行が日常化し、日本に来る外国人が増加している今だからこそ、読んでもらいたい本です。

（文学部4年　小川昌保）

私と図書館

「静」のための「動」

八田桂子

図書館は、静かで勉強するところという「静」のイメージがありました。いつも整頓されている本棚がある。着実に増えていく本がある。きれいな机と椅子がある。新しい雑誌に新聞がある。

でも、これはこう表現できます。返却台の本をきちんとなおす。毎月、予算を頭に入れながら(!?)本を購入する。古い雑誌を新しいものに取りかえる。

このように考えますと、「ある＝静」として、あたりまえにとらえていた図書館を、「する＝動」としても、とらえることができます。「ある」ために「する」のでは、ないでしょうか。

「ある＝静」の状態は、「したい」欲求を満たしやすい状態のことと思います。なぜなら、消しゴムのカスのない机ならば、勉強したい気持ちになりやすい。本を探したい、借りたい欲求が、整理された本で満たされやすい。

私達の「したい」欲求を満たすために、「する＝動」の図書館も必要です。でもこの「動」は目立ってはいけません。図書館の「ある＝静」の状態がこわされるからです。

だから、「動」のはたらきは、こっそり行われていて、感謝や賞賛を受ける機会が少ない。当然、「静」もあたりまえと思われているので、賞賛も受けれません。少し哀しい存在です。

でも、ある時、親の無償の施しに気付き感謝するみたいに、図書館の謙虚な施しに気付くのでしょうか。それとも、時に、親が子の欲求を拒否して、子の成長に導くように、図書館も本を延滞すると、その期間、借りれないという拒否から、気付くのでしょうか。

私は、後のことで気付きました。一度、私は、借りていた本をなくしかけたことがあります。私が図書館を無視したことから、おこった出来事でしたが、見つかるまでに、わりと大きな出来事になっていきました。「専門書やし、なかなか高い本やろう。」とか、「買ってきて、それから謝りに行った方がいいのかな。」とか、「もう、本を借りにくくなるな。」とか考えてしまいにしんどくなりました。見つかった時は、解放感があり、図書館の無償の施しに感謝というかそういうものを抱きました。でも、ちょっとしたら、痛くも痒くもない小っちゃな出来事になりましたが。

私達のしたい欲求を満たしてくれる、「静」のために「動」のはたらきをもつ図書館。すごいと思います。でも、こう賞賛したところで、おおげさで嘘くさいと思われるでしょうし、やっぱり、延滞すれば、その期間、本を貸さない図書館の態度を受けることとなるのですね。

(社会学部4年)

龍谷大学 図書館の歴史6

―蔵書の充実と「龍谷蔵」の新設―

成山雅康

前々回までに大宮図書館蔵書充実の経過を紹介してきましたが、今回はこれに引き継ぐ貴重なコレクションの収集と貴重書収蔵庫たる龍谷蔵の新設について報告します。

禿氏文庫　昭和23年11月、仏教史学科創設者で、東洋印刷史、仏教史の碩学である故禿氏祐祥名誉教授旧蔵のコレクションが故宮崎円遵名誉教授のご尽力で本学図書館に寄贈されました。その業績を彰して「禿氏文庫」と命名されたこのコレクションは、親鸞聖人ご真蹟『涅槃経の文』をはじめ、印度・中国・日本の仏教関係古写・古刊本、古地図、版画、拓本等の貴重資料を約3000点含み、禿氏先生の印刷、紙、仏教の研究を裏付ける資料が多数収蔵されています。

禿氏文庫のうち主として紙にかかわる資料は分散し、最終的には若干の図書と古紙見本等が「紙の博物館」(東京都北区)に収蔵されました。

大谷探検隊将来資料　昭和24年、大谷探検隊将来「西域文化資料」約9000点が学術研究資料として西本願寺より龍谷大学に寄贈されました。

大谷探検隊は、西本願寺第22世宗主鏡如上人、大谷光瑞師が仏教東漸の跡を調査する目的で1902年から1914年までに3次にわたって組織された中央アジア学術探検隊で、イギリスのスタイン、フランスのペリオの探検と並び称されるものです。探検隊は敦煌、トルファン、ローラン等のシルクロードの各地で発掘を進め、多数の資料を収集しましたが、残念なことに探検隊収集品は一度は日本に運ばれながら、その大半が当時の朝鮮総督府博物館や旅順博物館等に移管されたため、結果的には収集品のごく一部が日本に将来されたに過ぎません。日本に残された資料も個人所有として散在しました(後年、個人所有の美術関係資料が東京国立博物館に収蔵)。スタインやペリオの探検が国家的事業として実施され、その収集品がそれぞれの国立博物館に収蔵されているのと大違いで、一宗教法人の財力で組織された大谷探検隊の限界だと言われています。その他多くの問題があったものの、大谷探検隊の功績は素晴らしいものがあります。

西本願寺にかろうじて残された2つの木箱に入れられた収集品がさきに紹介した通り本学に寄贈されました。コレクションの内容は仏典、社会経済文書、西域語文書、絵画、彫塑、染織、古銭等に及んでいます。代表的な資料としては重要文化財に指定された『李柏文書』や『伏羲女媧之図』等があります。

龍谷大学に寄贈された昭和28年、総合的研究のため関西の研究者を総動員して「西域文化研究会」が組織され、その研究成果は『西域文化研究』全6巻7冊として刊行されました。この研究が日本における中央アジア研究を触発したものとしてその功績が広く讃えられています。

その他の文庫　代表的なコレクションを紹介しましたが、これ以外にも敦煌出土古写経を含む「山之内文庫」、南画家・陽明学者の故甲斐虎山氏の「文中園文庫」等20余りにのぼるコレクションが昭和10年～30年代に寄贈されていますが、本学図書館貴重書が多くの方々の善意によって形成されたのが良く理解できるでしょう。

龍谷蔵の新設　こうして収集された貴重書は図書館書庫内のロッカーに納められていましたが、もし火災が発生すれば一般書と同様に灰燼に帰す恐れがあり、貴重書庫の設置が望まれていました。大宮図書館建設30周年にあたる昭和41年、新しく貴重書庫が建設され大谷光照前門主の篇額が掲げられ、「龍谷蔵」と命名されました。

龍谷蔵は雑誌整理室を改造した間口5m、奥行6mの耐火構造の金庫室で、天井ぎりぎりまで書架及びロッカーが設置され、西域文化資料を含む貴重書のすべてが収蔵されています。貴重書収集がさらにすすめられた今日、その収容能力が限界に達しています。　(瀬田図書館課)

龍谷大学図書館報『来(らい)・ぶらり』第6号
1992年4月発行
編集・発行　龍谷大学図書館
〒612 京都市伏見区深草塚本町67
☎075-642-1111(代)